

## 伝統技術小屋掛け

今泉宗男

田峯には田峯観音の靈驗伝説にある、夏に雪を降らせて村人の危難を救った事により、そのお札に村が三軒になるまで芝居を奉納するとの約束で、明暦元年（一六五五）正月一七日の祭礼から現在に至るまで、多くの艱難を克服し継承されてきた奉納歌舞伎があります。

この歌舞伎はそれ以前にも行なわれていたものと推測され、突然始まったものではないと考えられるのが妥当であり、伝承事項として語り継がれたきつかけが、前記の明暦元年であったと考えられます。

最初に舞台が建てられたのが慶安三年（一六五〇）であり、この事が前記の裏付けでありま

す。ただしこの時代は組み立て式舞台で行なわれていました。

その後宝暦八年（一七五八）には固定式舞台で規模も大きく奉納歌舞伎の最盛期であったものと考えられます。その後天保十二年（一八四一）に至り、老朽化した舞台でもあり、幕府から天保の儉約令がだされた事もあって、固定式舞台は解体されて再び組み立て式舞台になったといわれ、禁止された歌舞伎は

「手ぬぐい被り」といって、隠れて芝居を奉納しています。

その後現存の舞台が文久三年（一八六三）固定式舞台として再建されました。

この舞台に付随する観客席が伝統技術の小屋掛けの小屋で祭礼当日の観客を収容します。

農村舞台の研究をされていた前橋市立工業短期大学の「松崎茂教授」はこのような工法の小屋掛けは、栃木県に丸太でこれに似たものが見られるが、竹で行なわれているものは他には見られないといわれ、この研究に協力されたのが名古屋工業大学の「城戸久工学博士」であり、愛知県内の主立った舞台と観覧席を研究されています。

この調査は昭和二八年（一九五三）から行なわれ、報告書は昭和三三年（一九五八）に書かれています。

本年八月三十一日付けの中日新聞に掲載された「赤坂の舞台と小屋掛け」の記事に、田峯の小屋掛けは赤坂から伝わった技術であると考えられますが、これについてはいささか信憑性に欠けるものと思えます。まず昭和六一年まで続けられた小屋掛けとありますが、その頃の小屋の形態が田峯と類似していたのなら、名古屋工業大学の「城戸博士」

が前橋工業短期大学の「松崎教授」に教えなかつた事になります。この調査の範囲は小さな集落にまで及んでおり、その中の主立ったものを報告したとされています。

田峯の小屋の形態は跳ね木が天秤式になっており、屋根に柔軟性を持たせています。それに加えて、棧敷のそれぞれについて階級による指定がされています。それは幕末時代の名称が使われております。列挙すれば次のようになります。寺棧敷の中央に「代官・寺・庄屋」とあり舞台正面の一番離れた棧敷をツンボ棧敷といい、「庄屋」の席で並び順が決められています。

その左前から花道にかけて「村役人」の棧敷・花道裏は「最下級百姓」・平棧敷の中央は「天領百姓」・平棧敷最後部は「私領百姓」などの指定がされています。これは小屋が幕末においてすでに掛けられていた証でもあります。また舞台が建てられたのが文久三年であり、その頃の小屋掛け技術が伝承されたものであると考えて無理はないと言えます。それ以前にも組み立て舞台と併用された可能性もあり、赤坂の舞台より現存の舞台でも六年前に建てられているなどを総合した上の新聞記事に對

する疑義でもありません。